青年期の少女の日記に書かれたナラティブ・ディスコースの分析による「書くこと」の意味の考察
—生涯発達的アプローチから—

石　田　喜　美

1．研究の目的と方法

本稿では、特定の個人による「書くこと」の実践[1]と、その実践がもたらす個人の発達的変容の事実を詳細に記述する。その目的は、学習者に生じる「書くこと」の学びを捉えるための新たな視点を明確にすることである。

本稿において「書くこと」とは、文字言語による表現活動全体を表す。「書くこと」は国語科の重要な柱として、また、近代学校教育の重要な課題として注目されてきた。しかし一方で、学校教育を離れた場面での「書くこと」の実践、すなわち、仕事や家庭など日常的な場面で行われる実践は正当に扱われてこなかった。すなわち、学校での「書くこと」の学習を進める上で考慮すべき学習者側のコンテクストとして日常的な実践が扱われることはあっても、学習者同士でやりとりされる手紙や交換日記、携帯電話のメールなど、日常的な「書くこと」の実践それ自体によって促される学習や発達を捉えるための明確な枠組みは提示されてこなかった。

しかし、学習者のことばの学びを包括的に捉えようとするならば、学習者の生涯にわたる学習や発達を視野に置き、生涯にわたって「書くこと」の実践と関わる学習者を想定する必要がある[2]。また、そのような学習者像に応じた「書くこと」の学びを捉える視点や枠組みが必要となる。このような視点や枠組みを得るために、本稿ではあるひとりの少女、千原さき（仮名）の日記に書かれたテクスト（以下、日記テクスト）を、一人称のナラティブ・ディスコース（narrative discourse）として捉え、これを一つの事例として分析する。事例として一人の少女の日記を選択した理由は、日記が私的な状況で行われる自主的な「書くこと」の実践であるという事実による。「日記を書く」という実践がいかにして行われ、それは書き手である千原さき自身にどのような意味があったのかを明らかにすることで、学校という枠にとらわれずに「書くこと」を議論するための視点や枠組みを得ることができる。

また本稿では、書き手がナラティブ（narrative、語り）を構成する状況、すなわち、「日記を書く」という状況そのものに迫ることを意図して、日記テクストをナラティブ・ディスコースとして捉える。ナラティブ・ディスコースは二つの側面から構成されている（松木，2000；桜井，2002）。二つの側面とは、「何が書かれているか」という内容に

関わる側面と、「いかに語られるか」という言語の使い方に関わる側面である。本稿ではこれら二つの側面の関わりに焦点をあてる。具体的には、日記の記述内容と日記における自称詞使用との関係を分析することによって、日記の書き手である千原さき自身の変化と自称詞の変化との相互的な関係を明らかにする。そして、「書くこと」が学習者と世界との関係をめぐる複雑な実践であると考察する。またこの考察を踏まえて、生涯にわたる「書くこと」の実践を捉えるためには、「学習者」と「世界」、そしてそれを媒介する「書くこと」という三項関係を枠組みとして用いることが有効であると結論する。

2.「日記を書く」という実践

「日記を書く」とはどのような「書くこと」の実践なのか。日記についてはすでに多くの研究が行われているが、「日記を書く」という行為を社会・文化的な実践として捉えた研究は数少ない[3]。また、参与観察法によってさまざまな「書くこと」の実践を記述してきた近年のリテラシー研究は、「ラップ」(Rap)[4]や「グラフィティ」(Graffiti)[5]など、複数の人々によって行われる協働的(collaborative)な実践に注目している(例えばCamitta, 1993)。そのため日記など私的な状況で個人的に行われる実践が対象とされることは少なかった[6]。デディエ(1987)は日記という社会現象に対して包括的な視野から取り組んだ研究である。この研究は総合的な視野から「日記を書く」という現象を説明している。このうち、社会学的・歴史学的な分析から、デディエは近代の日記に見られる二つの特徴を明らかにする。二つの特徴とは、経験を記録することで常に変化に脅かされる自己を守るという「会計簿」の特徴と、一日の出来事を告白することで自己の内面を統御する「信仰日記」の特徴である[7]。さらに、デディエは日記の書き手についても分析を行い、日記の書き手が近代主義文明の社会に対する居心地の悪さから日記を書き始めたことを明らかにしている。これらデディエによる考察を総合すると、次のような仮説を立てることができる。すなわち、「日記を書く」とは、社会に対して居心地の悪さを感じてしまう周縁的な存在の書き手が、過去の経験を語り、それを記録することによって、「自己の統治」(田辺, 2003)を行う実践である、という仮説である。しかし、この仮説はデディエによるヨーロッパの近代の日記に対する考察から導きだされたものにすぎず、この仮説の妥当性とともに、その内実についても明らかにされる必要がある。特に、青年期の日記を分析し日記における「自己の統治」の実践を確認することは、書き手の自己の発達を視野に置きながら、「書くこと」の意味を考察することができるという点で意義がある。

3. 日記の書き手

本稿が分析した日記の書き手である千原さきは調査当時21歳の女性であり、介護関係の施設で働いていた。20歳から現在に至るまで、彼女はホームページを運営しており、

その中で日記と詩を公開している。このホームページ上の日記で彼女が比較的一貫して「自分」という自称詞を用いていたことが今回彼女に調査協力を依頼するきっかけとなった。

以下、千原さきの生育歴の概略を示す。千原さきは小学校から中学校まで、男子のメンバーが主流を占める剣道クラブに所属していた。普段の生活では女子の友人よりも男子の友人に囲まれて過ごすことが多く、また、自身の風貌から男性と間違われることも多かったため、不安定なジェンダー・アイデンティティを抱えていた。また、そのような不安定なジェンダー・アイデンティティのために、自分をどのような自称詞で呼ぶかという問題はさまざまな場面で生じる問題であった。中学時代は当時流行していた「とんねるず」[8]というお笑いコンビの影響でお笑い芸人になることが将来の夢となった。しかし当時、お笑い芸人のほとんどが男性であったため、千原さきは「女性でない」というジェンダー・アイデンティティを持つこととなった。高校進学後は、女生徒がメンバーのほとんどを占める演劇部に所属した。この演劇部に同期で入部した生徒の中に、先天的に女性の生殖機能に欠損がある少女、杉江りつこ（仮名）がいた。千原さきは彼女と出会い、意気投合して、彼女と「相方」「心友」になる。杉江りつこは自分のことを「僕」と呼び、「自分は女ではない」と公言していた。そのため「女ではない」という意識をもつ千原さきは彼女に強く共感し、信頼を寄せていたようである。高校1年生の時期は、杉江りつこと出会い、その関係が変化していく様子が日記の主要なテーマのひとつとなっている。また、高校時代から、いわゆる「ヴィジュアル系」[9]の音楽を好むようになり、そこで表現される「無性」[10]の世界観に惹かれていった。その後、高校を卒業して介護系の専門学校に進学するが、専門学校時代は多忙な生活を送っていたため、記述された日記・詩は少ない。彼女はその後専門学校を終えて、介護施設に就職し、現在に至っている。

4．日記の性格

本稿が分析した日記は、千原さきによって、中学三年生の秋頃（15歳）から高校二年生（17歳）の冬まで書き続けられた日記であるが、千原さきはこの時期に日記だけを記していたわけではない。高校一年生（16歳）の夏あたりからは、便せんに詩を書き始め、後に詩を書くためのノートが作られ、日記と詩を平行して書く時期が続くが、高校二年生（17歳）の冬にそれら両方とも書くことをやめてしまう。しかし、その数ヶ月後には、詩だけを再開し、これが20歳まで続く。その後、現在に至るまでインターネットのホームページ上で日記と詩を書き続けている。

5．分析方法

本稿は、千原さきの日記の中でも特に、自称詞が複層的に用いられ、さらに自称詞が

大きく変動していく期間（高校1年5月7日から高校1年11月13日）に注目し、この期間の日記のナラティブ・ディスコースを構成する二つの側面を分析する。具体的には、①「いかに語られるか」という側面に関わる言語の使い方の分析と、②「何が語られているか」ということに関わる記述内容の分析である。

それぞれの分析を行うための鍵概念（key concept）の抽出については、個人事例研究の方法論（Bogdan & Biklen, 1992）に従った。①の言語の使い方については自称詞の使用に注目し、②の記述内容の関しては、まず、日記で語られる内容の中で頻繁に見られる用語をいくつかとりあげ、それらをカテゴリー化した上で、もっとも多く見られたものを「語りの基本概念」（桜井，2002）として注目した。その後、この基本概念が確かに千原さきにとって意味のあるものかどうかをインタビューで確認した上で、これを分析に用いた。このような手続きで導き出された基本概念は、「孤独」である。「孤独」は、日記の中で「自閉」「ひとり」などさまざまな用語で記述されるが、本稿ではこれらさまざまな「孤独」という感情にまつわる用語を総括して「孤独」と呼ぶ。

6．分析の基本概念

6.1. 自称詞

自称詞とは、語り手が自分自身を示す言語の総称であり、日本語には「僕」「私」といった一人称代名詞にあたるものや固有名詞などさまざまな自称詞が存在する（鈴木，1973）。本稿は、語りの様式を説明する言語・文体として自称詞に注目した。自称詞は千原さき自身にとって重要であるというだけでなく、「日記を書く」という語りの実践をみる上でも有効な手がかりとなる。

「僕」「俺」や「私」などいわゆる「一人称代名詞」の性質をもった自称詞は、広義の自称詞に含まれる。このような一人称代名詞的な自称詞は、日常的に用いられる自称詞の大部分を占めているため、自称詞を考える際には、自称詞の人称代名詞としての性質、すなわちシフターとしての性質を考慮する必要がある。シフター（shifter; 転換子）とは、ヤーコブソン（1973）によれば「指標的象徴」（indexical symbol）[11]に属するとされる。「指標的象徴」としてのシフターは「象徴」でありながら「指標」であるという特徴を持つ。またこの特徴は自称詞にもあてはまる。このような自称詞の「指標的象徴」としての性質は、ナラティブ・ディスコースにおける言語使用を考えるためには重要である。自称詞が「指標的象徴」であるということは、すなわち、自称詞が一般的な話者を示すという「象徴」としての意味を持ちながら、今、ここの場所でナラティブを構成する可変的な話し手自身を再帰的に言及するための「指標」的意味をも持ち合わせていることを意味する（バンヴェニスト，1983）。自称詞が示す「指標」的な意味内容、すなわち、今、ここでナラティブを構築する主体のアイデンティティはナラティブの進行につれてダイナミックに変化する。そのため自称詞の使用における変化から、書き手が「日記を書く」というナラティブ構築プロセスの中で行う「戦略」[12]（桜井，1996）を明らか

にすることができる。

6.2. 語りの基本概念としての「孤独」

日記の内容を検討した結果、語りの基本概念が「孤独」であることを確認した。この時期、「孤独」であること、すなわち周囲の人々と自分とが切り離されているという感覚に関わる概念が複数登場する。「孤独」の他にも、「自閉」「一人」「ひとり」などさまざまなことばを用いることで、千原さきは自己と周囲との切り離された関係をできるだけ忠実に表現しようとする。これは、この時期の彼女にとって、「孤独」が重要な意味をもっていたことを意味していると考えられる。

また、「孤独」は「日記を書く」という実践を知るための有効な概念ともなりうる。デディエ（1987）は、日記の書き手と社会との絶縁状態を指摘している。世界や社会とつながりをもたない孤立した感覚の存在は、日記の書き手が周縁的な存在であることとあわせて、日記を論じるための重要な要素である。

7．ナラティブ・ディスコースにおける自称詞

7.1. 友人との関係の親密化

本稿が注目する期間は高校1年（平成9年）4月21日から始まる。これは、当時の千原さきの友人である杉江りつことの関係が親密になり、それが日記に記された日である。ここで決定的なライフ・イベントとして記されているのは、千原さきが杉江りつこから手紙をもらったこと、さらにその手紙の中に杉江りつこの過去に対する悩みが綴られていたことである。おそらく、人には言えないであろう過去の悩みを自分だけに手紙で知らせてくれたことは、千原さきと杉江りつことの関係が深まる決定的なきっかけとなったと推測される。この日の日記は次のように記されている。

なお，「孤独」に関係する部分には二重線を施した。

> 「(平成9年4月21日）今日はりっchanがLetterをくれた。んで、返事書いたら、また、返事がきて…。りっちゃんは過去になにかあったらしい…。BUT、きっと言えない過去だと思うから聞かなかった。…（中略）…あと♥恋♥のナヤミが大きくふくらんでしまった。どーしよー…。とにかく、今日は一日中、ムカムカしていたようだった。そして、私は重大な『イヘン』が自分自身に起こった…というか起こした。それは…私は今日から千原聡（表）普通の状態。<u>自閉症を持つ、千原行史（チハラコウジ）（裏）極限の状態。今の私は千原行史だ。今、私は自分自身を…自分の心・体・全てを自ら閉ざしてしまった。</u>そりゃ、そーとーのリユウがあるんだけど、まっ、それは恋に関係あるとでも思ってくれれば十分さ。りっちゃんの事がとっても気になるよぉー♥ネっ。りっちゃん。」

ここで、「孤独」に関して用いられている言葉は、「自閉」、すなわち、「自分の心・体・全てを自ら閉ざして」しまうことである。「自ら閉ざして」しまうという記述からも明らかなように、ここで世界と自己との断絶状態は、自らの意志で行ったもの、自ら望んだものとして説明される。しかし、自らの意志で世界と自己とを断絶する状態は、「千原行史」という名付けによって、限定性が付与される。「千原行史」である自己は世界との関係を断絶するけれども、それは限られた状態（「極限の状態」）であって、ふだんは世界と自己とが断絶していない状態（「普通の状態」）である、と彼女は語る。さらに、「自閉」の理由として「恋」を挙げることで、「千原行史」と名付けられた「自閉」が一種のポーズであることが示される。他者（世界）とのつながりを求める「恋」と他者（世界）との断絶を求める「自閉」とはまったく矛盾する。他者とのつながりを求めるがゆえに他者と断絶する、というのは論理的に一貫しない。おそらく、ここで「他者と断絶する」と宣言することはただの見せかけ、ポーズであり、本来の主張は、「他者とつながる」ことであると考えられる。「ネっ♥りっちゃん」という最後の呼びかけは、そのようなポーズを示している自分を理解してくれるであろう杉江りつこに対して、「あなたならわかってくれるよね」と呼びかける確認要求である。ここで、「千原行史」という固有名詞は、想像上の対話者である杉江りつことの二重のコミュニケーションを作り出すために利用される。「千原行史」のポーズを示しながら、それが本当の自己ではないと語ることによって、杉江りつこと千原さきにしかわからない秘密の共同体[13]が、語りの中で作りだされている。

ここで重要なのは次の二点である。ひとつは、ポーズとしての「孤独」、すなわち「自閉」の状態に「千原行史」という人格の名前が与えられたこと。もうひとつは、日記を書く中で、杉江りつことの想像上の対話関係、想像上の秘密の共同体が作られていることである。上に引用した日記では、まだ「私」という自称詞が用いられているが、この後、この二つの要因が展開する中で自称詞が大きく変化していく。

7.2.「自閉」の自称詞：「千原行史」から「僕」へ

ひとつの展開の方向は、「千原行史」という「自閉」状態を示す言葉が、固有名から他の自称詞へと変化する、という方向である。この方向での展開は、さらにさまざまなポーズに名前が与えられることによって、複数の自称詞へと展開する。「二人称」「三人称」の自称詞が登場するのもこの展開の中で位置づけることができる。「二人称」「三人称」は複数化された自己のポーズの間の呼びかけを可能にする。つまり、あるポーズを示す自己が他のポーズを示す自己を呼ぶための呼称、それが「二人称」「三人称」である。

「（平成９年５月26日）　天気　✸　さき抹消実験２回目　　失敗
今日はtestが３枚（数Ⅰ・A、化学）返ってきた。But　赤点がなくて良かったとホッとしている。（だってマジで赤点とると思ってたもんっ！全教科。）んで、部活があって、やっと幸せになったってカンジっす。なぜなら、最近、つだかん[14]と話できなかったからなんとなくうれしかった。そう、今日やっと話すことができたん

よ♡っつってもボチ×２やけどネ。さきが今日は苦しんでなかったから僕もこうじも苦しくなかったよ。よかった×２。んで、剣の練習（っつっても竹刀で素振りしてただけ…。）して、「もろびとこぞりて」の練習して・・・。ってカンジで、まっ、けっこーＨＡＰＰＹだったと思います。んで、セッキーがスピッツがキライってことを知ったから僕は彼女に向かってワザと「空もとべるはず」を歌ってきかせた(?)。彼女はカナリ怒ってたさ…。Ｂｕｔ、そんなトコもけっこ→カワイ→♡　プリチ→♡なのさ。あと　僕というかさきの本音を書いてしまえば、は[あいつ]さきつだかんと一緒に帰りたかったらしい…。それはただなんとなくらしいが、女心ってのは分かんねぇもんだな。男の[オレ]聡には…。でも、さきはけっこ→（っつってもたまぁにだけど…。）カワイイとこもあるんだぜ…」

ここでは、「さき」「こうじ（行史）」「聡」の三つの固有名（下線）が用いられていると同時に、「僕」「オレ」といった一人称代名詞的な自称詞（二重下線）も用いられている。さらに、固有名と他の自称詞が組み合わされた形式のもの（囲み）も存在している。ここで、「さき」という固有名詞に「あいつ」という「二人称」の自称詞のルビがふられていること、また、その文章の主語として「僕」という自称詞が用いられていることから、「あいつ」という「二人称」が「僕」というポーズを示す自己から「さき」と名付けられた自己への呼びかけを行うために利用されていることがわかる。また、「二人称」を用いて「さき」である自己を語ることで、「さき」は現在の語り手と異なる存在として作り上げられる。つまり、日記の冒頭に「さき抹消実験２回目　失敗」と記されているが、この日記を書くこと自体が「さき」と名付けられた自己を現在の自己と切り離す実践となっている。

固有名詞と「一人称」の自称詞との一対一関係を想定すると、「僕」がどの固有名詞と対応するかという問題が生じる。ここで用いられている「僕」は多義的であり、ひとつの人格を示す固有名詞に対応するとは考えにくい。例えば、「聡」に「オレ」というルビが振られていることから、「聡」という固有名に「オレ」を対応させ、「僕」に「こうじ」を対応させると、「僕もこうじも」という記述は同じ人物を二回指し示すことになってしまい、矛盾が生じる。

つまり、ここで「僕」という自称詞は「こうじ」という固有名詞にも「聡」という固有名詞にも対応するものとして用いられている。単にこの時期が、固有名と他の自称詞との一対一関係が成立するまでの過渡期であったという説明も可能である。しかし、この時期は千原さきの日記の中で、「僕」という自称詞だけが爆発的に増加した時期であるため、そのような説明は困難である。この時期「僕」という自称詞が爆発的に増加したことも考慮するならば次のような説明が可能である。つまり、「僕」という自称詞が「聡」「こうじ」という二つの固有名詞にも対応した結果、「僕」という自称詞が「聡」「こうじ」という固有名詞の代わりとして用いられるようになり、「僕」という自称詞が増加した、という説明である。

7.3.「自閉」と「孤独」：りつことの関係の変化

ここでは、「聡」という固有名に「俺」という自称詞だけを対応させることができたにも関わらず、「俺」と「僕」という二つの自称詞が用いられている理由を考察する。この理由を考えるために、二つの事実を確認しておく必要がある。ひとつは、当時、千原さきのあだ名が「聡」であり、杉江りつこも含め彼女の周囲の人々が千原さきのことを「聡」と呼んでいたという事実。もうひとつは、杉江りつこが自分のことを言及するために用いていた自称詞が「僕」であったという事実である。以下、「俺」と「僕」の両方が用いられている日記を事例として考察する。

「(平成9年6月24日) 今日は、朝っぱらはめちゃ×2調子悪かったけど、あることをキッカケに元気がでてきた。それは…。僕はじぇら[15]が犯してしまったりつこへの罪を手紙で伝えて、何回も×2謝った。謝っても謝っても謝りきれなかった。そしてりつこも僕に手紙をくれた。その中に『さとしと話せなかったりするとね、すげー悲しーんだよー』って書いてあって、『りつこも僕と同じ気持ちだったんだ…』って思った。最近ず→っと『りつこと話がしたい』って日記に書いてたからすんげぇ→く、うれしかったのだ。俺とりつこはもう大丈夫。…」

「(平成9年9月8日) …僕はおーちゃんにも『カワイイ』と言われてしまった…。もう終わりだ…。俺のきずきあげた『人に嫌われるモノ』が消えかかっとる…。どうしよう。でも、なぜ僕の行動（というか反応）は『カワイイ』と言われるのだろうか…。ワカラナイ…。…」

ここで、「聡」や「こうじ（行史）」といった固有名は、りつこの声を引用する部分以外に登場しない。また、ある人格のポーズを示す明確な文体も存在しない。それにも関わらず、「俺」（二重下線）「僕」（下線）という自称詞だけが使い分けられている。「俺」は、りつこと「大丈夫」な関係を持ち、自らアイデンティティ（「人に嫌われるもの」）を操作する存在として描かれる。それに対し、「僕」は、りつこに手紙をもらうことで救われ、自分の彼女に対する罪を「何回も×2謝る」存在、他者に操作されてしまうアイデンティティ（「カワイイ」）に戸惑う存在として描かれている。単純化してしまえば、「俺」は一人でも生きいくことのできる強者であり、「僕」は一人では生きていけず杉江りつこに助けを求める弱者である。これらは世界と自己との断絶状態における二つの形態ー自ら世界を断絶する「自閉」と世界から断絶されてしまう「孤独」ーにそれぞれ対応する。

固有名をつけられることによって示されたポーズとしての「自閉」は、千原さきが現実の社会関係を生きる上でのリアルな問題と直面することでその意味を変化させる。その問題とは、いかに杉江りつことの共同体を維持するかという問題である。この時期、杉江りつことの共同体は日記の上で語られる架空の存在ではなく、現実の問題となっている。しかしこの共同体は、その特殊な性格のために、千原さきは矛盾を抱えこんでし

まうことになる。この共同体の構成員は千原さきと杉江りつこの二人だけの閉じられた共同体でなければならない。千原さきは杉江りつこをお笑い芸人の関係になぞらえて「相方」と呼ぶが、この「相方」とは他の人々に開かれた存在ではない。二人がお互いに相手を唯一の「相方」と認める、ある種の閉鎖性が必要であり、周囲の他の人々をある程度切り離さなければこの共同体は成立しない。すなわち、この共同体を維持するためには、周囲の人々との断絶を保ちつつ、杉江りつことだけは濃密な関係を形成することが必要となる。しかし、このような特殊な関係を一貫した語りとして表現するのは困難である。杉江りつこ以外の人々との関係に基づいて記述を行えば、自ら進んで「嫌われ者」を演じる強者として自分自身を記述しなければならない。ところが、杉江りつことの関係においては、むしろ、彼女との関係を必死に保とうとする弱者としての自己が記述される。これら二つのポーズは相反する性格をもち、どちらかひとつのポーズを選択すれば、一貫した記述をすることはできず、どちらかの記述内容を放棄せざるをえない。そこで千原さきは、語りの途中でポーズを転換させ、別のポーズでまた語りだすという手法を採用した。こうすることで、一回の語りの中で両方の自己を共存させることができる。しかしこの手法を実現させるためには固有名詞以外の自称詞、しかも、固有名詞よりも簡単にポーズの転換を示すことができる自称詞が必要である。なぜなら、語られる内容が杉江りつことの現実の問題である以上その行為者は「聡」であり、他の固有名を利用することはできないからである。また、固有名詞によるポーズ転換は全体として一貫性のない印象を持たせるため、「杉江りつことの共同体を維持したい」という目的を共有する自己の記述としてはふさわしくない。そこで、固有名詞よりも簡単にポーズの転換を示すことのできる自称詞が語りを構築するために利用される。

7.4.「私」への移行

「僕」と「俺」との並列した使用が見られるとはいえ、この時期の日記における自称詞のほとんどが「僕」である。杉江りつことの共同体の崩壊を危惧し困惑する「僕」の存在が、この時期全体を通じて多く見られる。しかし 11 月 13 日以降の日記には、このような想像の共同体から千原さきが脱した様子が示されるようになる。そのきっかけとなる 11 月 13 日の日記を次に引用する。

> 「(平成 9 年 11 月 13 日) 今日はたくさんのいい意味がありました。いいイミで自分の悪いトコロを知りました。イイいみで自分の弱さを知りました。いいイミで自分にものすごく腹が立ちました。イイいみで自分にトドメを刺しました。僕は今日、たくさんの自分を知りました。とってもスバラシイ日でした。僕は自分を千原さきであると自覚しました。千原聡はステキな男友達です。でも、まだ私は聡のままで居たいです。これにはワケがある。少しでも貴明と共通の部分が欲しい。ただそれだけです。愛する人へのささやかな思いなのです。私の中でたくさんのことが変わった。いい意味で…。… (中略) …僕は自分の悪いトコロを知ったおかげで今日、

ちょっとだけ強くなれたような気がします。そして、こんな僕をちょっとだけ強くしてくれたのは心友であるりっくんです。僕の心(ナカ)にはいつもりっくんがいた。それはなぜか？きっと僕をちょっとだけ強くしてやろうとそのチャンスを僕の心(ナカ)で待っていてくれたのでしょう。だから少し強くなれた今、少しだけ心の中のりっくんが減った。淋しいけど僕にとってはいいことなんだ。I became a strong little。(私は少し強くなった。)…」

この日記が書かれた次の日の日記から、自称詞のパターンは「私」を中心にしたものへと移行する。ここでは「僕」(下線)「私」(二重下線)と固有名詞(波線)との関係を検討する。これらの関係が特に表されているのが、「僕は自分を千原さきであると自覚しました。千原聡はステキな男友達です。でも、まだ私は聡のままで居たいです。」という文章である。ここで、「僕」に対し「自覚しました」と過去形が用いられていること、「私」に対し、「居たいです」と現在形が用いられていることから、自称詞が過去の自己と現在の自己とを隔てる役割を担っていると考えることができる。もちろん、現在形と過去形を用いるだけでも「過去とは異なる現在」を語ることは可能である。しかし自称詞による区別を用いることで、明確に、自己そのものの断絶に焦点をあてた物語をつくりだすことができる。過去の自己は「僕」であり、現在の自己は「私」である。だから、「私」を用いる限り、「私」は現在の自己であって、過去の自己とは異なるということを明確に示すことができる。時制は現在に対する過去という関係しか表示しないが、自称詞は過去の自己と現在の自己との断絶を語るために利用することができる。

また、「淋しい」という表現自体が、これ以前にはほとんど見られなかった表現であること、そして、それが過去の自己である「僕」のものとして明示されていることから、ここでの「孤独」が今までのものとは異なることが示されている。自称詞は、このように、現在の自己と異なる過去の自己を作り出し、このような「孤独」の移行を作り出している。

8. 結　果

以下の表は、「孤独」(あるいは「自閉」)の変化と自称詞の使用の時期的な変化を上から順に表にしめしたものである(表1)。この表から、「孤独」や「自閉」をめぐるナラティブを構築する中でそれぞれの自称詞がアイデンティティを構築するための「戦略」として用いられている様子がわかる。

表1　日記の変化のまとめ

	「孤独」	「自閉」	自称詞
1↓	(杉江りつこに理解されたい)	ポーズとしての「自閉」	ポーズを示す固有名詞
2↓	(杉江りつこに理解されたい)	複数のポーズの中の「自閉」	ポーズを示す自称詞
3↓	世界から断絶された戸惑い	自ら世界を断絶	語りにおける矛盾の解消
4	一人でも生きていける強さ		過去の自己との断絶

当初用いられていた「千原行史」などの固有名詞は今、ここで日記を書く主体を日常とは異なる主体として示すことを可能にする。このように「ポーズを示す固有名詞」は語る主体と日常を生きる主体との差異を構築するための語りの「戦略」として用いられている。また次の時期にはポーズが複数化し、固有名詞以外の自称詞が主に利用され、同様の「戦略」が行われる（「ポーズとしての自称詞」）。この時期は同時に、今、ここで語る主体と別のポーズを示す主体との関係を構築するために二人称や三人称の自称詞が用いられる。このように、「自閉」する主体と語る主体との関係をめぐってさまざまな自称詞の「指標的」意味が利用される。さらに次の時期からは「孤独」と「自閉」という類似した二つの経験をめぐる記述内容が存在するため、自称詞はさらに複雑な形での「指標的」意味を持つ。すなわち、一つの自称詞に一つの「指標的」意味が対応するのではなく、複数の自称詞の関係性そのものに「指標的」意味が生じる。例えば、「僕」「俺」という自称詞が併用されていた時期において、これらの自称詞の意味は、「僕」対「俺」という関係性の中で明らかになった。また最後の時期においても同様に、「私」対「僕」という関係性の中で新たな語る主体を示す自称詞として「私」が選択されていた。

9．考　察

以上のような自称詞の意味の変化は、語り手、すなわち日記の書き手である千原さきが、今、ここで語る主体とは異なる別の主体を構築しつづけた結果として生じている。例えば、語り手は別の主体が複数登場した結果、「自閉」を示す自称詞は固有名詞から一人称代名詞へと変化し、また、さらに「孤独」と「自閉」が分化することによって自称詞の構造が複雑なものとなった。つまり、千原さきにとっての日記は、継続的に現在の語り手とは異なる自己を作りだす「書くこと」の実践であったと考えられる。デディエ（1983）による考察―周縁的な存在の書き手が行う、経験の記録による自己の統治―と重ね合わせれば、彼女は、自己自身の差異化を行いつづけることで自己の統治を行っていたと解釈することができる。自己自身の差異化を行いつづけること、それは、世界と自己との関係を語りなおしていくことでもある。同じ日の日記であっても、彼女は自己と世界との関係を語りなおす。そして、その語りなおしを可能にするための鍵となるものが自称詞であった。自己と世界との関係を何度も語りなおしていく中で、自分自身の

物語を見つけていくことーこれが、日記を書くことによる自己の統治であり、すなわち、「日記を書く」という、「書くこと」の実践の姿であると考えられる。

このように、「書くこと」は、学習者自身と世界との関係をめぐる複雑な実践である。そして生涯発達的な観点から「書くこと」の実践を捉えるためには、このような三者の関係、すなわち、「学習者」と「世界」そしてそれらを媒介する「書くこと」との関係を視野に置く必要がある。例えば，本稿では「日記を書く」という実践のみを扱ったが、作文や詩など他の「書くこと」の実践も、日記とはまた異なる形で、「学習者」「世界」との関係を媒介していると考えられる。

そこで今後、「書くこと」をめぐる学習や発達を生涯発達的な観点から明らかにしていくためには、さまざまな「書くこと」の実践がそれぞれどのような形で「学習者」と「世界」との関係を支援しうるのか、という問いを立て、具体的な学習者の事実に基づいてこれを明らかにしていくことが課題となる。

注

1 本稿では「書くこと」の実践の他に、リテラシー実践（literacy practice）という語を同様の意味で用いている。

2 国語教育における生涯発達的な視点の導入については難波（2001）を参照。

3 デディエ（1987）は、日記について多角的な視野から総合的に論じたものであり、現在の日記研究でも引用される文献である。この研究では、ヨーロッパの多くの日記についての検討がなされているが、日記の内容のみに焦点があてられており、日記において「書く」という実践そのものは明らかにされていない。

4 「ラップ」とは韻のある対句からなる独創的な詩である。通常ポピュラー音楽のリズムに向けて歌うことが意図されるものであるが、「書くこと」の実践として行われることも多い（Camitta, 1993, p238）。

5 「グラフィティ」とは、自らの名前を絵画的にデザインして公共の壁の上に書く、文化的な実践である。しばしば「落書き」として非難の対象となる。

6 Camitta（1993）は暇つぶし目的で行われる、私的な「書くこと」の実践を報告しているが、この報告は日記に焦点を当てたものではない。

7 「会計簿」は「記録・保存」「所有・蓄積」の役割を、「信仰日記」は「自らの犯した罪に対する痛悔の祈り」の役割を果たす。デディエ（1987）pp.56-71. を参照。

8 石橋貴明（タカさん）と木梨憲武（ノリさん）の男性二人から成るお笑いコンビ。

9 音楽だけでなく衣装・舞台などヴィジュアルな側面の世界観にもこだわるバンド集団の総称である。「死」への方向性をもつ Gothic と「永遠の少女」を示す Lolita を組み合わせた「Gothic & Lolita」（通称「ゴスロリ」）と呼ばれる独特の世界観をその特徴とし、「無性」の演出もその世界観の演出に含まれる。

10 男性・女性といった性のない存在であり、「中性」（男性・女性の中間）とは意味が異なる。本研究では千原さきの意思を尊重し「無性」の語を用いる。

11 「指標的象徴」とは、"慣習規則" によってその対象と関係をもつという「象徴」の性質と、対象を直接指し示すという「指標」の性質との二つを合わせ持つという記号としての機能を示している。詳しくは、ヤーコブソン（1973）を参照。

12 「戦略」とは「個々の状況に応じていかに自己概念を選び、行為を行うかという主体の方法論」である（桜井，1996，p45）。

13 本田（1996）を参照。

14　同じ部活動に所属する先輩（男性）の通称。
15「じぇら」とは「聡」「こうじ」と同様、千原さきが自分の人格に名付けた固有名である。

文　献

Bogdan, R.C. & Biklen, S.L. 1992 Qualitative research for education: An introduction to theory and methods. Boston: Allyn & Bacon.

Camitta, M. 1993 Vernacular writing: Varieties of literacy among Philadelphia high school students. Street, B. (ed.) Cross-cultural approaches to literacy. Cambridge University Press.

デディエ，B. 1987『日記論』，西川長夫・後平隆訳，松籟社．

本田和子　1996『交換日記：少女たちの秘密のプレイランド』，岩波書店．

松木啓子　2000「エスノグラフィックインタビューにおける指標的装置」（『現代思想』Vol28, No.8, pp.192-199.）

難波博孝　2001「生涯発達と国語教育ーことばの学びの生態史に向けてー」（日本教科教育学会編『新しい教育課程の創造ー教科学習と総合的学習の構造化』，教育出版，pp.92-103.）

桜井　厚　1996「戦略としての生活ー被差別部落のライフストーリーから」（栗原彬編『講座差別の社会学第二巻　日本社会の差別構造』，弘文堂，pp.40-64.）

桜井　厚　2002『インタビューの社会学ーライフストーリーの聞き方』，せりか書房．

鈴木孝夫　1973『ことばと文化』，岩波書店．

田辺繁治　2003『生き方の人類学ー実践とは何か』，講談社．

バンヴェニスト，E. 1983.『一般言語学の諸問題』，河正夫訳，みすず書房．

ヤーコブソン，R. 1973.『一般言語学』，川本茂雄・田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子共訳，みすず書房．

（いしだ　きみ　筑波大学大学院博士課程　人間総合科学研究科　学校教育学専攻）